

2019年
11月25日号 No.1546



週刊

教育資料

EDUCATIONAL PUBLIC OPINION <http://www.kyoiku-shiryō.co.jp>

潮流

教育支援通して地球市民を育成

認定NPO法人JHP・学校をつくる会副代表理事 今川純子



資料

「不登校児童生徒への支援の在り方について(通知)」^①

文部科学省

CONTENTS

▶ 2 潮流

教育支援通して地球市民を育成

今川純子(認定NPO法人JHP・学校をつくる会副代表理事)

▶ 5 解説・ニュースの焦点

○10月の大学生就職内定率は76.8%で高水準を維持

編集部

○正しい言葉遣い、国語教育の充実などを国に期待

編集部

▶ 8 校長講話

東須磨小学校一部教師のいじめ事件に思う

西林幸三郎(大阪芸術大学短期大学部保育学科長・教授)

▶ 10 管理職養成 教頭実務ガイダンス

資料編・学校における働き方改革—モデル校

実践アイデア集^①

▶ 12 『つまずき』に学ぶ学校づくり

保護者対応のつまずき^②

～「バッチ処理」を活用しよう～

武井敦史(静岡大学大学院教授)

▶ 14 管理職必携 安心・安全の新常識

自助の心を蓄える白い小箱運動^③

古谷賢治(一般社団法人日本非常食推進機構代表理事)

▶ 16 実践! 校長塾

小中連携による家庭学習の手引きの作成から

推進するカリキュラム・マネジメント^③

～各教科等の特質に応じた見方・考え方を自在に動かして～

植松航一朗(長野県富士見町立境小学校校長)

▶ 19 資料

「不登校児童生徒への支援の在り方について(通知)」^①

文部科学省

▶ 35 教育の危機管理

教育現場の総量規制のすすめ

石橋昌雄(立正大学社会福祉学部特任准教授、前公立小学校校長)

▶ 38 事務新時代

学会リポート^④

大阪の教育協働の今

～近畿ブロック地域研究会

日本教育事務学会事務局

▶ 40 高校現場最前線

6年間の挑戦

～探究学習を通して、生徒も教師も学び続ける学校に～^①

大村寛之(和歌山信愛中学校高等学校 地域との協働による高等学校教育改革推進事業運営委員長)

▶ 42 若手教師に伝えたい

「学級・授業づくり」とっておきのツボ

保護者面談 ラスト1週間の裏技

～ほめる材料が見つからない場合～

俵原正仁(兵庫県芦屋市立宮川小学校校長)

▶ 44 変わる教育委員会

国際化に対応できる力を育む

竹田具治(香川県・東かがわ市教育委員会教育長)^③

▶ 45 教育問題法律相談

子どもの不法行為と親の法的責任

佐藤香代(弁護士)

▶ 46 現場の課題に応える教育センター

子どもたちの未来のために

～教育人材育成と学校支援の総合的な拠点として～^①

田中俊穂(神奈川県立総合教育センター所長)

▶ 48 BOOK

『教育格差』

『教師の勝算』

▶ 49 自著を語る

『野球消滅』

中島大輔(スポーツ・ノンフィクション作家)

▶ 50 今さら聞けない!? マナーと常識

ティータイムの作法

柴崎直人(岐阜大学大学院教育学研究科准教授)

▶ 51 故きを温めて

過ぎたるはなお及ばざるがごとし

福本郁子(盛岡大学准教授)

▶ 52 マイオピニオン

災害時対応こそ発達障害のある子どもたちへの視点

品川裕香(教育ジャーナリスト)



撮影：OWL 野口佳那子

認定NPO法人JHP・学校をつくる会
副代表理事
いまがわすみこ
今川純子さんに聞く

潮流

教育支援通して 地球市民を育成

1993年からカンボジアをはじめ

教育を必要とする地域の子どもたちのために

校舎建設や芸術教育などを支援してきた。

地球市民の感覚を持つ若者を育成している。

カンボジアでの校舎建設からスタート

団体名にある「JHP」とは英語表記（Japan team of young Human Power）から採ったもので1993年に設立された当時は「カンボジアの子どもに学校をつくる会」という名称だった。カンボジアではポル・ポト政権時代に、教師を含む知識人層が虐殺され、校舎も壊されるなど、教育が徹底的に破壊された。そこで「JHP・学校をつくる会」では多くの人からの寄付をもとに、カンボジア内に学校の校舎を建設し、音楽や美術などの芸術教育を担う教師の育成などの教育支援を行ってきた。

その後も、カンボジアでの児童養護施設への支援やポル・ポト時代に教育を受ける機会のなかった成人への識字教育などにも取り組み、2011年からはネパールでの学校建設や、日本国内での災害被災地への緊急支援活動も実施してきた。

今川 ポル・ポト時代の約20年間に、教師や僧侶を含めて知識人層はほとんど殺されました。1992年に私が初めてカンボジアに行ったときは、校舎がなくて大きな樹の木陰を教室にしていたり、砂ぼこりの中を1時間以上歩いて通う子どもたちの姿を見ました。学校といってもトイレもなく、井戸もないので雨水を溜

めて飲むという状態でしたから学校建設とともに清潔なトイレも作り、衛生教育からスタートせざるを得ない状況でした。

昨年1月の段階で、修理中や建設中も含めて、これまでに360棟の学校が新たに作られた。現在も老朽化した校舎の修復や教室数の足りない学校への増設などのメンテナンスにも力を入れている。1棟に3、6の教室数があるが、雨季に水没する地域には高床式の校舎も建設するなど、現地のニーズに応じた校舎づくりを進めてきた。

カンボジアは長らくフランス式の教育だったので、音楽や美術、体育は教科として位置付けられていなかったため、校舎建設に続いて1990年代後半から音楽や美術の教育普及の活動も推進してきた。こうした教育支援の結果、カンボジア政府が2016年から全ての学校で音楽や美術の教育を行う方針としたことを受けて、専門の職員やトレーナーの育成、小学校などでの教科書や指導書の作成などの活動にも力を入れている。

今川 私共のNPOの代表をしている脚本家の小山内美江子も私自身も、終戦直後の日本で、焼けた学校の跡地で折れたみいすちと机代わりの画板で苦勞しながら勉強した体験があるものだから、カンボジアの子どもたちが安心できる校舎

で落ち着いて学べる環境を作りたいと、切実に感じました。終戦直後の私たちもそうでしたが、カンボジアの子どもたちも学ぶことへの意欲がとても高く、目がキラキラと輝いている様子を見て、教育の復興が未来を切り拓いていくことに直結しているとも感じました。

二一ズや現地の状況に応じて支援

当初は、子どもたちを指導する教師自体がいないということもあって、カンボジアの教育省に相談して教師を確保できた地域から校舎を建設していくことにしたという。本場に教師が確保できるか、子どもたちが学校に通ってくれるかなど、現地の日本人スタッフが調査をして、支援が「押し付け」にならないように配慮した。必要に応じて教員養成学校などの施設づくりにも取り組んだ。

今川 最初のころは、小さな子どもを背負って子守をしながら勉強している子どももいましたし、外から教室を覗いているだけの子どももいました。国語（クメール語）や算数などの実学だけでなく、芸術系の教育についても、心の教育につながり、表現することの楽しさを知ってもらいたいと支援してきました。まずは日本で不要となった鍵盤ハーモニカなど

を集めて、楽器メーカーに吹き口などを取り替えてもらうなどの協力をいただき、カンボジアの学校に届けることから始めました。ボランティアとして参加した日本の学生などの若者が現地で演奏すると、子どもたちはとても喜んでくれました。

ただ、不要になった日本のオルガンを持っていったこともありましたが、雨季の現地では湿度が高すぎて、メンテナンスが難しいこともあり断念しました。

また、美術関係では、日本の企業の支援で古いカレンダーを集めてもらい、現地では、その裏紙を使って子どもたちに絵を描いてもらったこともあります。

カンボジアなどでの学校づくりや教育支援のほか、日本の若い世代をボランティアとして現地に派遣する活動にも力を入れている。毎年8月には、地球的視野を持つ人材の育成を目的に、高校生以上を対象とした「カンボジア体験ボランティア」を実施している。現地では、建設した校舎の清掃やペンキの塗り直し、修繕などのメンテナンスなども行っている。

今川 このほかにも、カンボジアでは成人のための識字教育も実施しています。2016年にこの分野で活動していた団体が閉会したことを受けて、事業を引き継ぎました。子どもたちが学校で学ぶこ

との意味を親たちが十分に理解していないと、子どもが学校からドロップアウトすることがあります。現在は主に40〜50代の成人が100人程度、月曜から土曜日まで毎日2時間ほど、仕事が終わった後に識字教室に通っています。この世代は子ども時代も含めて20年間も教育を受けてこなかったため、読み書きや計算の初歩を学ぶことが生活に直結するとあって、熱心です。夜は電気がないので、日本の企業の支援で100台のランタンを貸し出して、通学や教室での学習に活用しています。識字教育を受けることで、新聞が読めるようになり、社会への目が広がっていくことに役立っているように思います。

学ぶ目的、将来の夢を持つ場に

こうした活動のほか、2002年にペンペンに「幸せの子どもの家」という児童養護施設を創設した。スタート時は、それまでゴミ山で生活していた孤児たちを支援するために作ったという。こうした子どもたちの生活と就学を支援することで、「将来は教師になりたい」「警官になって社会のために仕事をしたい」という、将来の夢や学ぶ目的をしっかりと持った子どもたちが育っている。

今川 現在は、ゴミ山で生活するような子どもはほぼいなくなっています。親が病気などで学校に通えない子どもなどの、生活と学びの機会となるような場になっています。

また、私たちの会では、毎年8月にボランティアを募ってカンボジアでさまざまな活動を体験してもらうツアーを実施しています。大学生や高校生が主流ですが、毎年、数人の社会人にも参加していただいています。その中に学校の教員もいました。ちょうどカンボジアの現地スタッフが来日して、衛生教育について日本の学校での実践を聞きたいということでしたので、教員の方に報告していただきました。社会人のボランティアの方に元教員という方がこれまでもいて、カンボジアでの芸術教育の立ち上げなどでアドバイスをいただいたりもしました。

学生など若い人たちがカンボジアでボランティアを体験する活動では、最近は高校生などの参加も見られるようになったという。昨年の活動記録集にも、文具の寄贈や校舎の補修、ブランコなどの遊具づくり、現地の学生との交流などの様子が紹介されているが、「昨年に続いて2回目の参加となったが、学校へ入ることはできても家庭の事情から十分な教育を受けることのでき

ていない子どもたちが大勢いることを改めて知り、それについて考えたことがとても印象に残った」「子どもたちが生活しやすく、何より学校の楽しさに触れ、友達とたくさん遊んだり、人間関係を築き、自らの才能を発揮できる支援を行えるような教育を国全体でサポートする必要があると思う」などと高校生が感想を綴っている。

今川 カンボジアの子どもたちは、教育環境という面では、日本より遅れている部分もありますが、どの子どもも学校が大好きで、「不登校」はありません。何が幸せかということは、物質的な豊かさだけでは決まりませんが、校舎も含めた学校づくりや教育面での支援はこれからもまだまだ地道に継続していく必要があります。自分のためではなく社会や家族のために勉強して医者や教師になりたいと、夢や社会的な目的を持って意欲的に学んでいるカンボジアの子どもたちの姿から、今の日本の教育のあり方を考えることも必要ではないかと感じます。学校関係者の方でこうした活動に関心のある方は、本会のホームページなどを見ていただければ、できることから応援をしていただければと願っています。

認定NPO法人JHP・学校をつくる会
<http://www.jhp.or.jp/>